

# SSKP

# おたよ

NO. 240 2013年4月

—聴覚障害児と共に歩む会— トライアングル TRIANGLE



# サプライズ! 松山ケンイチさん登場 トライアングル・クリスマス会

開会の挨拶は鈴木リコちゃん。

「今日はお忙しい中、トライアングルのクリスマス会に来て頂いて、ありがとうございます。」



昨年の12月15日に東京大学先端研で、トライアングルのクリスマス会が開かれました。

「最初に、サプライズがあります。とっても、すてきなクリスマスプレゼントを専務理事の油井昌由樹さんが用意してくれました。俳優の松山ケンイチさんです」(見玉眞美理事長)  
「おはようございます。おじゃまします」(松山さん)

「よく、いらっしやいました。実は、トライアングルのことを松山さんと会うたびにお話していました。そうしたら、松山さんが、大変に興味を持たれました。是非みんなと友だちになりたいと、今日は、来てくれました」(油井)

「後ろで見えていますので」(松山さん)

こうして始まったクリスマス会。午前中は、勉強会。トライアングルの卒業生の菅原有紀さん(NEC勤務)と勝野崇介さん(立教大学3年生)に「小中学生に伝えたいこと」というテーマで話してもらいました。話の後は、質疑応答。子供たちと、クリスマス会に参加した先輩、そして松山さんが車座に。子供たちの悩みに、先輩が自分の経験を踏まえて答えました。

# おたより



講演をしてくれた  
トライアングル卒室生・勝野崇介さん



午後は、クリスマスケーキ作り、大道芸人のトムさんの玉乗り、大学生によるパネルシアターなど楽しいイベントが次々と。充実した楽しい一日となりました。

## 小中学生に伝えたいこと

### ■ 勝野崇介さん（立教大学3年生）

小学校の時は、勉強は全くしませんでした。嫌いでした。体育だけが好きでした。社会も覚えられなかった。理科も興味がなかった。算数も分らなかった。でも、かけ算だけは、頑張った。それが大事だったと思います。最初は掛け算ができませんでした。そのときに、救われたのは、小学校の時の担任の先生が、僕だけを放課後残して、かけ算を教えてくださいました。今でも、その効果が残っています。

得意なところを伸ばす。それが将来、いろんな経験をつんで、広がっていくんじゃないかな、と

思います。夢に向かって道は広がります。これからいろいろ経験を積んで、自分の道を見つけてください。そのときに、やはり勉強が必要になってきます。

小学校で聞こえる人の中に入っていると、分からないことがたくさん出てきます。みんなに伝えたいことは、それを分らないままにしない。将来の人生に非常に大きく関わってきます。だから、勉強が嫌いでも、できるところまで、自分で勉強をする。やってみる、という気持ちを持つ、それが大切です。

小学校での人間関係、友だちとのコミュニケーション、みんなこの悩みを持っていると思います。小学校時代、男同士は話したいケンカ、スポーツ、体を動かしながらコミュニケーションをとることが多いです。小学校の時は、聞こえる子どもの中で生活してきました。友だちと遊ぶときは、お母さんも一緒にずっと回ることができません。だから、声でコミュニケーションをとることが少ない、スポーツを中心に人間関係を作ることが

ました。スポーツを通じて、自分の聴覚障害について、伝えることも大事だと思います。

小学校のときのコミュニケーション方法は、僕は口話でした。でも、大変でした。自分から話して、理解してもらっても、相手のことが分からない。そういうことが多かったです。そのときに、手話があれば新しい世界があったかな、と僕は今、振り返ってそう思います。あの頃は自分で聞こえないという障害を受けとめきれなかった。そういうこともあって、手話を覚えようとしなかったんです。でも、今みなさんは、手話と関わりがありますよね。手話を大事にしてほしいと僕は思います。

ご両親の方には、子どもたちとコミュニケーションを取るときには、手話を使ってあげてください。そういうことが大事になると思います。将来、手話を使って、聞こえない人として能力を発揮するという時代がいつ来ると思っています。

最後に、皆さんにお願いがあります。人として大切なことは、挨拶です。この挨拶が、できるか

二人目の講演者は  
トライアングル卒室生・萱原有紀さん



井上 紳介（けんすけ）君は、松山さんへ書いた手紙をプレゼント。大きな声で読み上げました。  
「平清盛は、いつもお父さんと見えています。僕はデスノートのLが大好きです。幼稚園の時は、Lの真似ばかりしてLのように椅子に座ったり歩いたり本を持ったりしていたので、先生やお母さんから叱られたこともあります。今日、お会いできて本当に嬉しいです」、松山さんも大感激。

どうかで、友だちの数も変わってきます。「おはよう、こんにちは」というその2つだけ、人と関わられる。友だちも増える。さらに、「ありがとう、ごめんなさい」の分だけ関わりが深くなります。みなさんもこのことばを大事にしてください。それがこれから、良い友だちに恵まれることとなります。

5年、10年後に、自分はこうなっているか、想像してみてください。想像するだけでいいです。自分がどうなりたいかが分かると思っています。今はできなくても、自分がなりたいもの、やりたいこと、それで生活をして欲しいと思います。

■ 萱原有紀さん（NEC勤務）

私は、普通の小学校、中学校、高校に通い、大学は、帝京大学の文学部の教育学科を卒業しました。昨年4月から、NEC、日本電気株式会社の営業部で働いています。

小学校6年から中学に入るまでに一番悩んだことを話します。

小学校1年から3年生まで、普通に友だちと人間関係をつくり、毎日楽しく過ごしましたが、その後はコミュニケーションをとるのが難しくなりました。女の子はグループを作るからです。そのため、コミュニケーションをとる相手が、いつも一緒にいる人になってしまっているので、別のグループの人とはおしゃべりができない。その時に、聞こえないのでそのことについてすごく悩みました。自分はなぜ補聴器をしているのか、普通の学校に通っているのか。情報保障はなかったため、自分で勉強をし、友だちの中にも自分から入っていく必要があります。障害のことを友だちはあまり分かってくれませんでした。

小学校4年生、5年生からはさらに部活動を一緒にやることになりました。スポーツをする機会も増えていきました。その時はけっこう楽しくやっています。が、勉強は難しく分からなくな

っていました。コミュニケーションだけに集中している状態でした。家では親は手話を使わないし、自分もうまく話せない。小学校5年になってからは、話しが上手でなくなっていました。

小学校6年になったときに、ろう学校に入った方がいいとの、親に勧められました。ろう学校に入れば、コミュニケーションがとれる、親も手話を習える。だからよいと。でも勉強面では遅れるかもしれないとも言われました。普通学校では、勉強はどんどん進むかもしれない。コミュニケーションは自分から何とか獲得する努力をする方法しかない。が、悩んだ結果、地域の普通学校に通っていました。コミュニケーションはしょうがないと思っていました。でも、自分から諦めないで、相手に話しかける、気持ちを伝える。そのような気持ちを持って話していました。

二両親にはその悩みを、分かって欲しいと伝えたいと思います。思春期の頃は、やはり、話せないで、親御さんに気を遣ってもらえなくとも

# おたより

ありがとうございます。

小学校の時にやってよかったことが、一つあります。「99マス」といって、たとえば、1〜10まで書き、また下に縦軸横軸に10を書く。どんどん、かけ算をしていく。すると本がもらえるのです。そういうものが本屋さんにあります。それを使って、かけ算をどんどんしたのです。毎朝、頭を使うのです。それをやったお陰で、小学校6年のときに、その勉強が大変ではなくなりました。中学校に入ったとき、勉強について行くことができたと思っています。

やはり、小学生の間は遊びが中心で、楽しいこともたくさんあって、楽しいことから身についてきました。そこから少しずつ人生が、自分の役に立っていくのではないかと思います。

友だちとぶつかったときは、ちゃんと納得して、できるようになるまで、話してほしい。人間関係は、これからつまづくことも、多いと思います。なかなか超えられないこともあります。でも、頑張りたいと思います。

## 小学生の悩みに、先輩が答える

**児玉**／松山さん、今の話を聞いての感想を話していただけますか。

**松山**／勝野君が言ってくれた、5年後、10年後の自分を想像するというのは、大人になった今でもけっこう難しいものです。では一体何をしたらいいか。多分、勝野君が言っていた、挨拶、「ありがとう」「ごめんなさい」を続けることによつて、5年後、10年後はより良い将来が作られるのではないかと思います。僕も今、挨拶を大切にしてい

ます。

**児玉**／ありがとうございます。それでは、先輩に質問です。女の子は4〜5年になるとおしゃべりで付き合うので、中に入れないで困ったという経験が多いみたい。それはどうしたらいいですか？

**山本（大学生）**／小学生の時は自分が聞こえないこともよくわからないので、話すことも難しいと

思います。でも、自分は聞こえないから口を大きく開けてというとか。文を書いてとか。いろいろ方法はあるけれど、一つ一つ、難しいかもしれないが、分らないときは、もう一回、何？と聞いて、口をしつかり見たり、書いてもらうという方法があると思います。

**菅原**／小学校4年のときに、いじめられた経験が





あります。聞こえないから、ろう学校に行け、そのように書かれたこともありました。それを見た瞬間に、涙がでるより、いらいらするので、それを友だちと先生に言いました。思いをぶついたら解決しました。

**児玉**／自分が怒っている、というのを言うのも大  
事かな。

**佐藤（親）**／親御さんにもしてもらったり、言っ  
てもらって嬉しかった。分かって欲しかった、こ  
言ってほしくなかった、などがあれば、参考に聞  
かせてください。

**前屋（大学生）**／発音の練習がトライアングルで、  
ありますね。カ行がどうしても出来なかった。お

母さんと一緒に、マンツーマンで、家でも練習を  
しました。お母さんがどうやればできるか、いろ  
いろ工夫をしてくれて、やっとカ行ができたとき、  
お母さんと一緒に泣いて喜んだことがあります。

**勝野**／僕の場合はできることをみて、ほめてくれ、  
出来ないことはサポートしてくれる。それが子ど  
もから見ても嬉しいと思います。しっかりと、顔  
を合わせてコミュニケーションを取る。それが基  
本だと思っています。

**菅原**／嬉しかったことは、いろいろなことにチャ  
レンジするのがいいよ、と言ってもらったこと。  
気持ちが軽くなりました。プラス、一緒に手話を  
覚えてくれました。自信を与えてくれたこと、介

入しすぎないで見守って、介入すべき所は手を出  
してくれる。今思うと、非常に良かったです。

**山本**／毎日に帰って、いろいろ話しましたが、  
母はどんなに忙しくてもきちんと向きあって聞い  
てくれました。親子でコミュニケーションをとる  
ことが大事だと思います。小学校5、6年のとき、  
なぜ、自分が聞こえないのか母にたずねました。  
母にきくと、とにかく謝るだけでした。お互いに  
その場で泣いてしまったという思い出もありま  
す。今、思うとよい思い出です。

※クリスマス会の様子は雑誌「ピクトアップ」81  
号（2月18日発売）にも掲載されています。



# おたより

写真＝米内山功、尾藤能暢 構成＝田村美奈



# 小中高を振り返って

勝野崇介さん 立教大学3年生

トライアングルの卒業生、勝野崇介君は立教大学の3年生。明るく元気に毎日を送る勝野君に、大学生になった今だから思うことについて、様々な面から聞いてみた。

油井.. 大学ではどんな風に友達とコミュニケーションしているのですか？

勝野.. 口話でやり取りしながら、わからないところは紙に書いたりしています。僕の周りでは手話ができる友達が増えたので、手話も使っています。

油井.. みんなが手話に興味を持ったのは、勝野君に出会ったから？

勝野.. そうだと思います。入学のオリエンテーションのときに、みんなの前で聴覚障害について話をしたんです。そしたら、それがきっかけで、キャンパスを歩いているいろんな人から「あの時の人だよな。手話を教えてほしい！」と声をかけられるようになり、少しずつ増えていきましたね。最初に自分の障害について伝えるということは大事ですね。

油井.. 同感だね。今、家庭教師をやっているんですよ。どんな科目？

勝野.. 週に1回、中3のろうの男の子を教えています。基本は英語と数学の2教科ですが、英語を身につけるためには、国語が必要なので、3教科という感じですね。



油井.. 自分に置き換えてみたとき、やはり同じろうの人に教わった方がいいと思う？

勝野.. その方が安心します。すごく違いがあるんですね。先生が手話を知らない健聴の人だと、口を読み取らないといけないから、そのことで疲れてしまいます。目で見て勉強ができる環境はすこ

くいいと思いますね。

油井.. 勝野君が、手話を覚え始めたのはいつから？

勝野.. ちゃんと覚えたのは、中学生になってから。小学校までは普通学校だったので、中学校からろう学校に変わって、周囲の友達とコミュニケ



構成・文＝田村美奈



シオン方法がなかったもので、覚え始めました。小3までは体を使って普通にコミュニケーションをしていたので、みんなと同じだと思っていました。それが学年を重ねるにつれ、みんなが言っていることがわからなくて、喧嘩が増えたんですね。それをきっかけに、他のみんなと違うんだと気づいて。今までは、普通だと思っていたのに、世界が変わってしまったんです。

油井…体をぶつけ合う時には、言葉はいらないから、夢中で楽しくいられたんだね。

勝野…たまたまサッカーが得意だったので、それが大きいですね。小学校では問題もいろいろありましたが、友達が助けてくれました。ろう学校で出会った友達の話を知ると、小学校のとき、コミュニケーションがとれず、友達ができなくて、それが辛くてろう学校に変わったという人もいますね。

油井…ろう学校に行くと、手話を使う環境に入るとき、どんな印象だった？

勝野…映画みたいだと思ったのをはっきり覚えています。みんなが手話でパパーと話しているのを

見て、手を見ただけで言葉が伝わるのは、すごいな。自分もその中に入ろうと手話を覚えたんですが、残念ながら、日本語対応手話を覚えてしまっただけで……。僕の場合は言葉を先に覚えてしまったから、まず、頭の中で日本語が出てきて、それにあわせて手話が出てしまうから、日本語対応手話になってしまう。今、何とか日本語にシフトして行こうと思っているんですが、難しいですね。

油井…オレ、日本語が割れたという場合も、日本語の話の場合は、一瞬、パッと手を動かしてそれだけ。油井…すごいよね。あれはあこがれるね。

オレ、アメリカでろうの子供を持つ親御さんにお目にかかる時、日本と違って聞こえないことが全然気楽な感じがするのね。その一つにはハグとか、ボディタッチとか、他のコミュニケーションの方法を彼らは持つてるでしょ。そこに差がある気がするんだけど。

油井…海外にサンプルはないの？

勝野…文化の違いもありますよね。日本の場合は、自分の子供がろうとわかったときに、お医者さんから言われるのは「残念ながら」。そう言われることで、子供が自分とは違った人に思いがちですよ。でも、アメリカだと、「おめでとうござい

勝野…でも、組織とかお金の面とか、すぐには変えられない問題もあるわけで。

ますよ」と言われるらしい。最初の違いが大きいんじゃないのでしょうか。

油井…遅れているよね。日本は。でも、やればいんだよね。

話は変わるけど、中高とろう学校だったでしょ。

油井…でも、それはできそうな気がするよね。

勝野…でも、組織とかお金の面とか、すぐには変えられない問題もあるわけで。

油井…でも、それはできそうな気がするよね。

油井…遅れているよね。日本は。でも、やればいんだよね。

油井…でも、それはできそうな気がするよね。

話は変わるけど、中高とろう学校だったでしょ。

油井…でも、それはできそうな気がするよね。

話は変わるけど、中高とろう学校だったでしょ。

油井…でも、それはできそうな気がするよね。

話は変わるけど、中高とろう学校だったでしょ。

油井…でも、それはできそうな気がするよね。

話は変わるけど、中高とろう学校だったでしょ。

油井…でも、それはできそうな気がするよね。

（取材＝油井昌由樹）

# 平成24年度トライアングル 金山記念聴覚障害児教育財団の活動 そして平成25年度の活動に向けて



当財団は、聴覚障害児の教育を支援し、その進歩に貢献することを目的としています。  
24年度には下記の4つの事業を行いました。

## (1) 聴覚障害児に対する教育相談室の運営

- ① 言語聴覚士による聴覚障害児母子指導を  
東京大学先端科学技術研究センター3号館  
401号室にて行う。(30件)
- ② 幼児および成人の聴覚障害児を対象に  
相談業務を行う(10件)
- ③ 指導児、卒室児の幼稚園、小学校において、  
専門的な情報提供を行う(5件)

## (2) トライアングル金山記念聴覚障害児教育財団 の会員およびボランティアの交流推進

- ① トライアングル金山記念聴覚障害児教育財団の  
役員と会員の交流  
平成24年4月28日(土)
- ② 会員対象のクリスマス会

平成24年12月14日(土)

## (3) 聴覚障害を持つ本人部の交流を支援した。

### ① 手話講座の開催の支援

- (入門、応用20回 通訳10回)
- ② パソコン要約筆記入門講座
- ③ 室園晶子氏講演会

平成24年11月10日(土)

### ④ 東大先端科学技術研究センター・ 聞こえのバリアフリーシンポジウム

聴覚障害児の日本語発達のために  
「ALADJINを聴覚障害児教育の  
領域から読み解く」を共催する。

平成24年9月23日(日)

## (4) 聴覚障害児の教育についての広報活動

- 広報誌「おたより」の発行(3回)  
238号/239号/340号

## (5) 情報保障活動

トライアングル金山記念聴覚障害児教育財団の  
役員会議、交流活動、勉強会等においてパソコン  
要約筆記および手話の情報保障を行う。

## 24年度の財団の事業を終えて

平成25年1月末までにトライアングル金山記  
念聴覚障害児教育財団には、下記の皆様から会費、  
ご寄付を頂戴いたしました。

- 会員の皆様  
225名から135万円を頂戴いたしました。
- 賛助会員の皆様  
52名から26万円を頂戴いたしました。
- 法人賛助会費  
小林理学研究所様から100万円を  
頂戴しました。
- 寄付



また、会費の他に下記の方々から高額のご寄付を頂戴いたしました。

金山千代子先生、田中博先生、野島ハルエ様、小俣昌道様、東京京浜ロータリークラブ様、出井幸代様、武田智彦様、松島敏一様、三宅巧房様、武蔵野中央幼稚園ボランテア様、矢口菊枝様、吉田紀子様  
(平成24年度1月末調べ)

皆様からのご賛助を心より御礼申しあげます。トライアングル金山記念聴覚障害児教育財団のホームページ上に3月末までの収支決算をあらためてご報告させていただきます。

今号240号にてご報告させていただきましたが、昨年12月に行われたクリスマス会におきましては、NHKの大河ドラマ「平清盛」で清盛役を演じた俳優の松山ケンイチ氏がトライアングル

を訪れ、聴覚障害を持つ子供たちと真剣に語り合ってくれました。大ファンの小学生もおり、参加した子供たち、保護者たちは終始目を輝かせました。高名な大道芸人の「トムさん」も、不慣れた先端研の講義室で玉のりの大技を見せ、子供たちをドキドキさせてくれました。お二人をはじめ多くのボランテアの皆様により1年間の活動が支えられましたこと感謝いたします。

クリスマス会のなかで、トライアングル卒室生の勝野崇介さん、萱原有紀さんが講演をしてくれ、松山氏や他の大学生にも参加してもらい聴覚障害を持つ小学生と話し合いを持つことが出来ました。

参加した子供たちは地域の小学校に通う子供が多く、日頃切実に感じる言葉や友人との関係の悩みにについての発言が続きました。大学生からは、小さい時から状況は変わらないが、積極的に健聴の友人とも交流している、保護者も本人も手話を

学ぶ必要がある、今身につけるべき礼儀や勉強をおろそかにしないで、との励ましの言葉がありました。小学生は先輩の話を食い入るように見つめていました。

## 25年度の活動に向けて

トライアングル金山記念聴覚障害児教育財団は、25年度も聴覚障害児の教育と様々な教育の経路（聾教育のクリティカルパス）についての研究に、先端研バリアフリー分野と共同で取り組んでいきます。また、本人部からの強い希望によりライフサイクルにおいて重要な「結婚」「家族」について会員で語り合うキャンプを、考えております。

皆様のご協力を引き続きお願い申し上げます。

文Ⅱ 児玉真美（理事長）

## 平成25年度のイベント（予定）

5月18日（土）

学生会員の企画です。会員の交流を深めるため、ドッチボール大会、サッカー大会を予定しています。

7月20日（土）

道志の森キャンプ場（山梨）でキャンプのイベントを1泊2日で開催予定です。本人部の企画です。谷千春先生を講師にお招きして、恋愛をテーマにお話いただきます。その他にも、子供から大人までが楽しめる内容を企画中です。お楽しみに。

## 会員・賛助会員募集中！

トライアングルでは、会員はもちろんですが、活動を応援して下さる、賛助会員の方も積極的に募集しています。個人＝5,000円（1口）、法人＝50,000円（1口）。お友達など、お知り合いの方をぜひ御紹介下さい。詳細については、事務局にお問い合わせ下さい。

# SIGN

## 平成25年度 トライアングル手話講座 受講生募集！

### ■ 期間

前期 平成25年5月～10月（8月休み）

後期 平成25年11月～平成26年3月

第2土曜日（通訳クラス）

第3土曜日（応用クラス）

※講師のご都合で変更になる場合があります。

詳しい日程はお申込の方に別途お知らせします。

### ■ 時間

13:30～15:00

### ■ クラス

通訳クラス（手話の読み取りや表現のコツを手話通訳士である講師がプロの技でお教えます）

応用クラス（手話学習経験者で、さらなるスキルアップを目指したい方、ろうの講師と楽しく学べます）

### ■ 講師

谷 千春（通訳クラス）

手話通訳士。NPO手話技能検定協会理事長。日本社会事業大学非常勤講師。これまでにNHK手話ニュースキャスターやテレビの手話講座の講師を務める。英語の手話も堪能で、国際会議でも活躍している。

### 塩谷 武志（応用クラス）

1975年埼玉生まれ。4歳で失聴。13歳の時にろう学校へ転入し、初めて手話に出会う。手話講師デビューは19歳の時に地域の市役所から。手話モデルとしてドラマのオレンジデイズ、映画のバベルなどにも携わる。

### ■ 場所

東京大学先端科学技術研究センター3号館601

### ■ 費用

通訳クラス 9,500円（半期）

応用クラス 9,500円（半期）

2クラス受講 18,000円（半期）

※1クラス受講の方で申込クラスを欠席される場合、同月内で他クラスへの振り替えが可能です。

### ■ お申し込み・お問い合わせ

トライアングル事務局

Tel&FAX 03-5452-5322

E-mail: aq2t-ueym@asahi-net.or.jp

## 会費変更のお知らせ

会費の変更につきましてご報告させていただきます。従来の「聴覚障害児と共に歩む会・トライアングル」では、会員会費は6,000円、賛助会費は5,000円とさせていただいておりましたが、財団法人化に伴い会費も賛助会費も共に5,000円とさせていただくことになりました。トライアングル金山聴覚障害児教育財団の趣旨に賛同いただき、ご支援頂く全ての方を「会員」と規定させていただきます。

○会員会費（両親部・本人部・専門家部及び賛助会員を含む）5,000円

○学生会員費（学生の身分の方。大学院生を含む）3,000円

尚、従来ご寄付として送りいただいております方も多数ございます。引き続き同封いたしました振替用紙をご利用いただき寄付金額を含めた額をご記入いただければ幸いです。

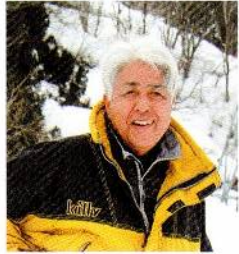
また、銀行振込をご利用いただいております場合には、「おたより」の裏面に新しい振込口座を載せてありますので、そちらの口座によるしくをお願いいたします。

今後さらに、トライアングル金山記念聴覚障害児教育財団は、聴覚障害児を持つご家族や子供たちに役立つ勉強会や交流の場を用意すると共に、新たな社会に役立つ聴覚障害児教育研究の試みを行って行きたいと思っております。引き続き皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

理事長 児玉眞美

## 評議員の方々から 「トライアングルの会員みなさんへ」

### 大沼 直紀 先生



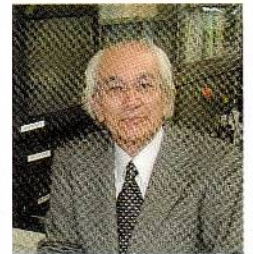
大学で特殊教育を専攻して以来50年にわたり聴覚障害教育を止めないでこられたのは、トライアングルの創設と発展に尽くされた金山千代子先生、今井秀雄先生、岡本途也先生の薫陶を受けたおかげです。71歳になったいま私に残された仕事は、聴覚に障害のある本人と親から学んだたくさんの方のことを整理し、後に続く人々に伝えることだと考え、新生トライアングル金山記念財団の活動に参加しています。

東北大学教育学部を卒業後、宮城県立聾学校に聴覚補償センターや乳幼児教室を設置。18年勤めた聾学校を退職しワシントン大学医学部附属中央聾研究所（CID）に留学。オーディオロジー（聴覚障害補償学）を研究。帰国後、国立特殊教育総合研究所の聴覚教育研究室長。昭和大学医学部耳鼻科で難聴・補聴器外来を担当、医学博士号を取得。筑波技術短期大学の開学時に教授。学長時代に短大を4年制化し国立大学法人筑波技術大学の初代学長に。退任後、東大先端研の客員教授。現在、バリアフリー分野の特任研究員。

私は子どもの頃から難聴で、1951年、18歳のときに左耳に箱型補聴器を初めてつけました。1949年に電気補聴器が日本で初発売された2年後です。聴力は60デシベルでした。その後、加齢と過労が（たぶん）主因で聴力が低下し、50歳代で100dbとなり、2003年に人工内耳の手術を受けました。メドエルで3人目の装用者です。1953年にできた聴力障害の若者が中心になって作った「みみより会」の1回生です。会誌「みみより」の編集長や会長をしました。「ものごとは思いつづければ、きっと成るものだ」が座右の銘です。

1934年3月浜松市生まれ。1956年東京水産大学卒。農学博士（東京大学）。東海大学名誉教授。魚類生活史学専攻。江ノ島水族館、金沢水族館副館長、東海大学海洋科学博物館館長。主な著書：「潮だまりの生物学」（講談社）、「魚は夢をみているか」（丸善出版）、「水族館への招待」（丸善出版）、「黒潮に生きるもの」（東京書籍）、「珊瑚」（法政大学）、「鯛」（法政大学）、「水族館」（法政大学）、「日本の海洋生物」（東海大学）、「水族館学」（東海大学）、「新版水族館学」（東海大学）、「アンコウの顔はなぜデカイ」（山と溪谷社）など。

### 鈴木 克美 先生



### 星川 宏之 先生



私が「母と子の教室」に関わったのは今から約30年前。おもちゃメーカーの社員として、障害のある子供たちが楽しく遊べる玩具の研究開発を、教室に通う子供たち、お母さん・お父さん、そして指導者の方々に協力いただきながら行いました。あれから30年。その間に、母と子の教室からトライアングルへ、そして法人格を取得することによって、評議員へと誘っていただきました。30年前の恩返しに、少しでも力になればと思っています。

1980年自由学園卒業、トミー工業（現 株式会社タカラトミー）に入社、希望して同年新設された障害児の玩具を開発する部署に配属され、目や耳の不自由な子ども達の玩具を開発。その後、障害の有無にかかわらず共に遊べる「共遊玩具」を、玩具業界に広げる。1991年、公益財団法人共用品推進機構の前身の団体（E&Cプロジェクト）を立ちあげ、共用品・共用サービスの普及に従事。1999年4月に同プロジェクトを公益法人として立ち上げ事務局長、専務理事に就任。現在に至る。主な著書：共用品という思想（岩波書店）後藤芳一・星川宏之 共著

私は韓国の大学時代に、家庭教師で美術大学に入学したい聴覚障害児を教えたことがあります。とても遣り甲斐のある、充実した経験でした。それが私の特殊教育の原点であり、教師としてやりたいことになりました。その後、私は25年前に日本へ留学し、筑波技術大学の教員として、聴覚系のデザインを担当しています。「トライアングル金山記念聴覚児教育財団」の一員として先生から親へまたは、親から子供までの三位一体的な循環の教育に期待しています。特に韓国や中国などのアジア圏の国際交流を通して異文化の理解や、体験ができるように努めたいと考えています。皆さんと共に心と心がつながる真のコミュニケーションの大事さを実践していきたいと思っています。

1961年生。九州芸術工科大学大学院芸術工学院後期博士課程修了。博士（芸術工学）。モスデザイン研究所、筑波技術短期大学を経て現在 筑波技術大学産業技術学部総合デザイン学科・教授。著書：『活字印刷の文化史』共著（2009）。招待講演：2012 Fourm UNESCO University and Heritage, Typl 2013 Hongkong 等。科学研究補助金：「日韓多言語『文献・資料調査研究』2009～2011、ハングル機械化の始終一敗米における『韓国国家文字プロジェクト』の調査研究」2012～2014。

### 劉 賢国 先生



### 金澤 貴之 先生



トライアングルを初めて訪問したのは1995年の春。大学院の修士課程在学中、「なぜ、聾教育に聴覚障害当事者の意見が反映されないのか？」という疑問を抱き、先進的な取り組みをしているところを訪ね歩いていました。そして金山先生の真摯なまなざしと優しいお人柄に「一目惚れ」し、トライアングルのファンになりました。大沼直紀先生を訪ねて筑波技術大学に伺ったのもその頃だったかと思います。その後、本当にさまざまなことを学ばせていただきました。トライアングルで特に大事だと思うのは、本人部会の存在です。成長した本人の意見を教育実践に活かしていくことができるシステムがあることで、停滞せず、常に挑戦し続ける実践ができるのだらうと思います。

東京学芸大学、同大学院修士課程で聾教育を専攻。筑波大学大学院博士課程に3年次編入学し、1年で中退。同大学文芸部、助手を勤めた後、2000年4月から、群馬大学教育学部障害児教育講座に講師として着任。現在、同大学准教授。2013年3月、博士（教育学）取得。博士論文は「聾教育における手話の導入過程に関する一研究」。

# 自分がやりたい事には どんどん挑戦してほしい！

文Ⅱ高木咲子

私は今、板橋区役所福祉部障がい者福祉課で働いています。仕事内容は障がい者福祉政策関係の補助金等の支払い業務や予算管理、さらに他の課や都その他に外部の企業から来た調査の処理、出席簿の管理等の庶務の仕事です。私が担当している仕事の内容は聞いてみると処理自体は簡単そうに思えますが、法や規則の内容やそれが定まった背景等を深くまで知ろうとすると難しく、毎日勉強をしなければなりません。

板橋区役所では現在私を含めて4人の聴覚障がい者が働いており、他にも様々な障がい者が働いています。一見すると障がい者に見えない職員もおり、障がい者だという事を後で知らされて驚くことも少なくありません。障がい者福祉課には手話出来る職員が10人くらいおり、その人たちとは手話を使ってコミュニケーションを取ることが多いですが、他の職員とは筆談が主なコミュニケーション手段です。

ここで、私が何故公務員になろうとしたのかを話したいと思います。私は実を言うと元々公務員になりたいとは思っていませんでした。何故ならば父が公務員であるため、たまに遅くに帰宅した

り、対人関係で気を遣ったり、緊急時の招集があったりと仕事の大変さは見えてわかってはいるつもりだからです。しかし、両親の強い勧めにより、特別区の公務員試験を受けることになりました。当時、他の会社から契約社員として内定を得ており、その会社に行く気満々でしたが、「滑り止め」の気分で渋々受けることにしました。この事を言ってしまうと他の公務員試験受験者に失礼でしょうが、とんとん拍子で筆記試験、一次面接、二次面接と突破。この合格の知らせに両親は驚いたでしょうが、私も内心では驚きました。そうすると今度は既に内定を得ている会社と比較し、悩んでどっちに入るのかを決めなければいけません。そうして1か月くらい悩んで悩んだ末に公務員の道に行く事を決めました。内定を断った会社はまだ障がい者の受け入れ環境が整っておらず、整えようと努力しているため挑戦するには面白い環境でだと感じたが、今回はリーマンショックの不況が続いており、契約社員だといつリストラされるのかわからない状態にあるため、安心な職業に就くのが一番だと決心したのでした。

対して厳しい職場だったら嫌だなと思いつながら初めて職場に行った時の気持ちを覚えています。今から思えば、障がい者に理解がある職員が多く、手話が出来た先輩がおり、とても恵まれた職場に配属されたのは幸運だったと感じています。公務員になってもうすぐ1年が経ちますが、私は仕事をするにあたって「障がい者だから出来ない」と諦めるのではなく、障がい者自分でも出来る事を探ってみよう」と強く思うようになりました。わかりやすい例を挙げると車椅子を利用している人は窓口の机の高さが適切なのかどうかをアドバイスする事が出来ます。他にも出来る事はあると思うので、それを探りたいと強く思うようになったのです。また、大変な仕事が終わった時や区民の方に「ありがとう」と言われた時はこの仕事をやっている良かったと思ひ、公務員の仕事に対して良い印象を持っていないかった頃の私に話して納得させたいくらいです。

仕事を続けていく上で大切なのはコミュニケーションと息抜きと諦めない事であると私は思います。まずコミュニケーションが大切になってくる

# おたより



のは、仕事に支障があると後で大変になるからだけではなく、他に人間関係を築くためです。聴覚障がい者だと音声情報を得るのが難しいため、他の人の会話や社内の噂話（？）を聞く事が出来ません。そこで私は手話が上手い先輩や他の聴覚障がいを持つ先輩との会話からそのような情報を得ています。私では得る事が出来ない音声情報を取り入れるためには対人関係を良い方向に持っていないといけない事が多く、コミュニケーションが欠かせません。

また息抜きも大事ですが、その手段は人によって違うと思います。私の場合、小学4年生の頃から始めたバスケットボールに加えて、最近では登山と消しゴムスタンプづくりにハマっています。登山は実を言うと苦手ですが、普段都心の真ん中では働いているため、360度見回して空が見えるところは新鮮な気持ちになります。消しゴムスタンプ

づくりにハマったのは昔から木版等何かしらを彫るのが好きだったためその関係で「へー、こんなものもあるんだ。」と始めたところ作品が上手く出来て嬉しくてハマってしまい、現在週に1個のペースで新しい図案を彫っています。

諦めない事の原点はバスケットボールから来ています。私は障がい者なのにも関わらず、一般の企業の合同説明会に積極的に参加して色々な方のお話を聞き、エントリーをしました。結果は惨敗でしたが、「障がい者だから出来ない」と諦めるのではなく、障がい者が出来る事を少しでも多く探ってみよう」と思うようになりました。障がい者に対する社会状況は厳しいままですが、障がい者だからと言って色々な事に挑戦しないのは人生を損しているから自分がやりたい事にはどんどん挑戦してほしいと思います。



# 21世紀の奇跡の人、福島智先生 9歳で視力、18歳で聴力の「喪失」と、 そして絶望からの「再生」



福島智先生

1962年生まれ。専門は障害学、バリアフリー論。東京都立大学（現・首都大学東京）卒。日本の盲ろう者として初めての大学進学者となる。同大学大学院人文科学研究科教育学専攻博士課程単位取得。現在、東京大学先端科学技術研究センター教授。博士（学術）。盲ろう者として世界初の大学教授でもある。

いよいよその日がやって来た。「福島智先生からじっくりお話を伺える！」

これまでに何度かお目に掛かってはいる、ご紹介も既に受けているが、ゆっくりお話し出来るのは今日が初めてだ。

福島智先生には人の心を引きつける不思議な魅力がある。透明感と無垢なたたずまいが対峙する誰をも笑顔にする。剥き出しの脆弱さが愛おしい。

ご存知の方も多かるうが、福島智先生は、まったく見えない、聴こえないという重複障害を持つた盲ろうの人である。4歳の終わりころ右目を摘出、9歳までは視力10と良く見えていた左目も失明。中学2年には右耳、そしてあろう事か高校生の18歳で左耳の聴力を完全に失い、あの「20世紀の奇跡」と呼ばれた努力の人ヘレン・ケラー女史と同じ盲ろう者となった。女史は生後19ヶ月、言語習得前に高熱を発し盲ろうとなった。そして6歳のとき、家庭教師サリバン先生の懸命な努力によって、映画や戯曲や伝記で有名な、指の間から流れ落ちる気持ちの良いものが「ウオーター！」であると知り、そこからすべてを切り開いて行く、ゼロから再生の人生である。が一方、福島先生は



# おたより

「盲ろう者として生きて」  
（福島智著／明石書店／  
2011年）



「生きるって  
人とつながることだ」  
（福島智著／素朴社／  
2010年）



「盲ろう者とノーマ  
ライゼーション」  
（福島智著／  
明石書店／1997年）



「渡辺荘の宇宙人」  
（福島智著／  
素朴社／  
1995年）



視聴覚情報の4つある入り口を、一つ一つ順番に時間をかけてえぐり取られて行く壮絶なる「喪失」の体験をされ、それを乗り越え今日がある。福島智先生の魅力はこの「喪失」の体験が鍵？！  
そもそも、「見えない、聴こえない」とはいったい？」  
筆者には無音の経験が幾度かある。NHK放送技術研究所の無音室での経験だが、最後のドアを

閉めると、ある種の圧力を感じた後、無音の中に、  
「チー」とか「シャ」とかそんな音のようなもの、所謂耳鳴りなり  
のようなものが次第に大きくなって聴こえ続ける  
のだ。よくよく注意をすると今も聴こえる、鳴っ  
ている。

インタヴューはこの素朴な質問から……。

## 今までの世界とは違う

## 異次元の世界にいるような孤独感

「福島先生は、御本の中で、耳鳴りが4種類とか  
6種類聴こえるとも書かれています」（油井）

「はい。キーとか、サーという高い音、ゴーとポ  
イラーが燃えているような音、シウルシウルといっ  
た風が吹き出すような音、その他にも合計6種類  
ぐらいの音が左耳の奥からしていますね」（福島）

「視界は全くの暗闇状態ということですか」（油井）

「お酒を飲むとか、血液のめぐりがよくなったと  
きに、雪明りのような白っぽいぼんやりした光が  
見える感じがします。たぶん、耳鳴りの眼球版、  
いわば目鳴りのようなもの。20歳のときに左目の  
摘出手術を受けたのですが、その直後から始まり  
ました。手術を執刀した先生に、なぜか光を感じ  
ると話したら、「そりゃ、心眼だよ。心眼で見れ  
るんだよ」と言われたのが印象に残っています。  
ジョークなんですけどね（笑）」（福島先生）

「御著書の中で、全盲ろうの高三の生徒として盲  
学校に復帰した際に、とてつもない孤独を感じた  
と書かれていますね」（油井）

「81年6月の終わりの頃。ものすごく孤独でした  
ね。盲人パレーをみんなで見たいんですが、全  
くわからない。僕が友人にどんな様子か聞いても、

一言だけ答えが帰ってくるだけ。すぐ側にみんな  
がいる、暖かい日が降り注いでいるけど、僕だけ  
異次元の世界にいるようでした。集団の中の孤独  
という言葉が胸に浮かびました。これが、僕が生  
きて行く盲ろう者の世界の本質なんだと感じ、あ  
る種絶望に近いものを感じました。

私の場合、通訳者の手が離れた瞬間に別の世  
界に行っちゃうような感じですよ。手袋を裏返しに  
するとかソックスを裏返しにするのに似ていて、  
物理的な距離は裏も表も布の厚さだけなのに、そ  
こに存在する世界は全く逆なんです。盲ろう者の  
世界は裏側の世界に入り込んでいます。裏返  
しになったら、元に戻して、他の人と同じ世界に  
つながるようにちょっとしたことをすればいいん  
だけど、自分の力では裏返すことができない。他者  
がコミュニケーションを提供してくれないと、い  
つまで経っても裏側の世界で生きていけないとい  
けないんです」（福島）

「盲ろうの世界は全く別なんです。御本の中で、  
『無音漆黒の世界にただ一人、地球からひきはが





され、果てしない宇宙空間に放り出されたような孤独と不安」と書かれていたのが印象的でした」  
（油井）

「その後、コミュニケーションツールとして指文字が使えることが、盲ろう者の側にいる人の基本なんだ、本来の姿だということを実演する人たちが現れて、徐々にエネルギーがもたらえたわけです。そのまま放って置かれたら、僕はコミュニケーションを諦めたと思います」（福島）

「福島先生でも、ですか」（油井）  
「はい。盲ろう者というのはこういうものだから、最初から人の世界に入らず、一人で部屋にいて一人でできることをした方がいいという方向に、私の考え方、行動パターンも行ったかもしれませんが」（福島）

### 見えて、聞こえることに 意味があるのではない

「先生の場合、健全な状態から右目の摘出、左目失明、そして右耳聴力、ついには左耳と奪われてしまった訳ですよね。その喪失感は想像を絶しま



すが……」（油井）

「9歳で視力を失って以降「なぜ、僕は目が見えなくなつたのか。見えないことの意味は何なのか」とずっと考えていました。小学校4年生で普通学校から盲学校に移り、そこで音楽をやったり、スポーツをやったり楽しく過ごしていました。それが中学2年の頃には右耳がほとんど聞こえなくなつた。それは恐怖であり、前途にも不安を感じ始めました。まさか、このまま左耳もなんてことはないよな。きつと全盲で片耳だけでやって行くんやなと思つていたら、18歳のときに残された左耳まで悪くなつてきて。内面的には、徐々に沈んで行く感じですよ。沼に沈むような、夜の海に沈んでいくような感じ。」「なぜ、目だけでなく耳までなのか。何のためにこういう苦しい経験をするのか。気が付くと、自分の生きる意味や使命などについて考えざるを得ませんでしたね。」

大学に入って1年目かな、盲ろうになつて2年が経過したときに、友人から「もし、神が現れて、目や耳を元に戻してくれるとしたら、どうする」と聞かれました。僕は「断るだろうね」と言つて



発話は音声で行い、相手の言葉は指文字で通訳を介して聞く。

います。それは、私をこういう風にしたのが神ならば何らかの意図があるだろう。それを今更やめるといふのは、神自身が自分の働きを否定することになるんじゃないかと答えています。病や障害とか様々なアクセシビリティが、その人に与える意味というのは変化して行くんですね」（福島）  
「今、同じ質問をされたら、どうお答えになりますか」（油井）

「基本的には同じことを言うでしょうね。全ての盲ろう者の状況を改善するようなことができるのであれば別ですが、私だけが覚えて聞こえるようになっても何の意味もありません。かえって同じ障害を持った人たちのためにやれることの力を削ぎますよね。」

私は、耳が聞こえず、目が見えない、この二つが重なって、努力したら何とかなるというレベルを超えた人たち、声を出そうと思つても声を出せない、苦しい状況にある人たちのことを効果的にアピールしていく立場に不思議なことにいます。言ってみれば、少数民族の独立開放、生活条件の改善のために、東京大学という多党派の中に替行

文・写真＝油井昌由樹、田村美奈

しているようなもの（笑）。そういう私が、物理的にも多数派の方に移行してしまつたら、何重もの意味で、裏切り行為になると思っています。

それに、今、50歳で見えて聞こえるようになって、自分がハッピーになるとも思えない。見えて聞こえることは便利なことだけど、それはすぐに慣れてしまうこと。見えて、聞こえることに意味があるのではない。見えて、聞こえていても自殺する人は年間3万人いるわけで、重要なことは、生きがいや、やりがいを日々自分が感じられるかどうか。どちらかというところ、丈夫な体になるとか、腹が凹むとか（笑）、そっちの方を望みますね」（福島）

### 人間は極めて脆弱な存在であり

#### 一人だけでは生きてゆけない

「人工内耳についてはどうお考えですか」

「大人になって、自分で判断して人工内耳にしようという人は自由、というのが基本だと思います。ただ、自分で判断できない小さい子供たちに手術

をするのは、問題があるのではないのでしょうか。心臓が悪いとか、その手術をしないと死んでしま

うという場合は、親の責任としてなるべく命を守るように手術するのは当たり前だと思います。しかし、人工内耳は、生き死には関わらない問題

です。一度手術をしたら取り出すのが大変な人工内耳をどうするかは、慎重に考えるべきものだと思います。仮に、手術をするにしても、決めるに

至る判断材料が、十分に親御さんに与えられているとは思えない。きちんと議論されていないので

はという気がします。将来的には今の補聴器と同じような形態で、簡単に付けたり外したりできる、

そういう負担が少ない人工内耳ができれば、だいぶ今の議論は変わってくると思います」

「全く同感ですね。」

「ところで、オレは、誰でも、何らかの形で盲ろうの体験をした方がいいと思うんですが、先生はどうお考えですか」（油井）

「盲ろう者の通訳介助者を育てる過程で、疑似体験をしてもらうことはやっています。一緒に手を繋いで歩いている介助者の存在だけが全て。それが印象深かったと言う人が多かったですね。」

人間は本来、極めて脆弱な存在であって、一人だけでは生きてゆけないというのは、比喩的な表現だけじゃなくて、その通りなんです。自分の未来は予測できないし、決めることもできない。

1秒後に何があるかもわからない。その中で生きている、生かされているのが人間。他の人がいな

いと存在もできません。

私の場合は、こうして話をするときも通訳者の存在でコミュニケーションが成り立っているの、理屈抜きに、一人ではやっていけないという感じになっていますよね」（福島）

「一人だけでは生きてゆけない、それは健常者も一緒です。3・11以降それに気づいた人はだいぶ多くなっているのではないのでしょうか。」（油井）

#### 「泰然自若」

インタビューを終えて、研究室で一人の福島先生を撮影しつつ浮かんだ言葉だ。盲ろうの障害者は地球上で最も弱い乳類の一人だろう。にもかかわらず、ファインダーの中の福島先生から、マハトマ・ガンジーの様な「強さ」を実感した。



定価：250円（1部）



## トライアングル金山記念聴覚障害児教育財団

### 【連絡先】

〒153-8904  
 東京都目黒区駒場4-6-1  
 東京大学先端科学技術研究センター 3号館  
 バリアフリー分野 福島研究室内  
 TEL&FAX：03-5452-5322  
 E-mail：aq2t-ueym@asahi-net.or.jp

HP：<http://www.asahi-net.or.jp/~aq2t-ueym/>

### 【口座】

郵便振替番号：00120-6-7642114  
 口座名：一般財団法人 トライアングル金山記念  
 聴覚障害児教育財団

みずほ銀行渋谷中央支店 普通預金  
 口座番号：14699933  
 口座名：一般財団法人 トライアングル金山記念  
 聴覚障害児教育財団  
 代表 児玉 眞美

ゆうちょ銀行 普通預金  
 口座番号：10030-34235981  
 口座名：トライアングル金山記念聴覚障害児教育財団  
 代表 児玉 眞美

### 【アクセス】

●交通  
 小田急線「東北沢」駅より徒歩7分  
 井の頭線「池ノ上」もしくは「駒場東大前」駅より徒歩10分  
 千代田線「代々木上原」駅より徒歩12分

●地図（下記参照）

### Area Map



### Campus Map



## もくじ No.240

■ クリスマス会報告	02
■ 卒室生インタビュー 勝野崇介さん	08
■ 活動報告	10
■ 評議委員からのメッセージ	13
■ 手記 高木咲子さん	14
■ 油井昌由樹の障害革命家を訪ねて 第9回 福島 智先生	16

## 表紙の絵について

### 「I LOVE YOUはメールでね」

春の風に乗って何処からかやって来た「I LOVE YOU」の文字は、目的地にたどり着いて弾けました。色鮮やかに、花やメロディーや、甘い気持ちと一緒に、春の空気に弾けました。今年も春がやってきましたね。どこかで良いことが起きているかもしれません。

（清須史門）

## 制作

編集：トライアングル広報部  
 油井昌由樹、田村美奈、十島典弘  
 表紙題字・絵：清須史門  
 デザイン：田村美奈  
 印刷・製本：株式会社 北斗社